



学校だより
ながや

令和元年度 第4号
令和元年 6月28日
横浜市立永谷小学校
校長 平野 好子

思いを伝える

校長 平野 好子

6月21日(金)に港南区民文化センターひまわりの郷で区内の各小学校の代表児童が一堂に会し、それぞれが「平和」について考え、自分にできることについての思いを伝える「よこはま子ども平和スピーチコンテスト」が行われました。本校では、6年生の小山莉斗さんが学校代表となり、裏面にも紹介したように18日の朝会で、自分の病気と向き合い、自分にできることについて考えたことについてすばらしいスピーチを行いました。その後も自分の思いが伝わるスピーチになっているか、何度も原稿を見直しながらスピーチの練習を重ね、その成果をコンテストで発揮しようと準備していました。しかし、前日からの発熱、当日の高熱は下がることなく、残念ながら、欠席せざるを得ませんでした。莉斗さんの思いを会場の皆さんに届けられなかったことは残念でなりませんでしたが、莉斗さんの応援として会場で、スピーチを聞くことを希望した児童7名と一緒に他校児童のスピーチを聞きました。

どの児童も、自分のとらえた「平和」に向けて、今自分ができることをスピーチしていました。子どもたちが自分たちで未来を創ろうとしている姿が見られ、頼もしく感じました。

支え合いの輪を広げよう

小山 莉斗

世の中には、大きな病気をもってる人がたくさんいます。病気の種類はたくさんあり、人それぞれ違います。ぼくも、胆道閉鎖症という一万人に一人の難病をもつ一人です。生まれてすぐ肝臓の機能に異常が見つかり、早く治療を始めなければ、命にかかわる病気でした。一才半の時、お父さんから肝臓の一部をもらう「生体肝移植」という大手術をしました。それでも完全に治ったわけではなく、薬を一生飲み続けなければいけません。

ぼくは一年生の時、病気が悪化して入院し一人で過ごすことがありました。その時はとても寂しかったです。少しでも気持ちを和らげるために、看護師さんや同じ病室の子と話をしました。そうすると、不安な気持ちが楽になりました。僕の通っている病院では、年に一度、医者から病気の詳しい話を聞いたり、同じ病気の人たちの体験談を聞いたりする会があります。お互いの病気の状況を伝え合うことで、「病気で辛い思いをしているのは、ぼくだけじゃない。」と安心することができました。

病気をもっていない人の中には、「悪化していくかもしれないという怖さや不安を共感するのは難しいのではないか。」と思う人もいるかもしれません。そんなことはありません。ぼくが五才の頃、まだ体が弱く、週に二、三回しか保育園に通えませんでした。ぼくは、家にいる日が多く、気持ちがふさぎ込んでいました。そんな時、同じクラスの友達が、「早く、毎日通えるようになるといいね。一緒に遊ぼう。」と声をかけてくれました。自分の事を待っていてくれるのだと感じ、とてもうれしくなりました。このように、目の前で、不安そうにしている人の気持ちに寄りそうことは、誰にでもできることではないでしょうか。ぼくは、病気があるけれど、今も元気に生きています。それは、友達がぼくの気持ちに寄りそってくれたからです。自分は、一人で生きていくのではない。今までの体験から、人に共感し、お互いに支え合って生きていくことが誰もが自分を大切に、共に生きることにつながるのだと気づきました。

世界には、辛い思いをしていたり、自分は独りぼっちだと不安を感じたりしている人がいます。そういう人はなかなか気づかれないことがあります。だからこそ、ぼくの不安を和らげてくれた看護師さんやぼくの気持ちに寄り添ってくれた友達のように、次はぼくが誰かの不安を取り除いてあげたいです。多くの人が同じ思いをもって行動すれば、世界に支え合いの輪が広がるのではないのでしょうか。

もし近くに不安を感じている人がいたら、その人の気持ちに寄りそってください。その優しさで、支え合いの輪を広げましょう。

思いをもつこと、伝えようとする大切さを改めて大事にしていかななくてはと感じさせられました。日々の学校教育の場で取り組んでまいります。

5月27日に学校づくり懇話会、6月19日に地域子どもの安全対策協議会を行いました。ご協力ありがとうございました。